

宝塚市自立支援協議会 専門部会「こども部会」活動経過報告

平成 29 年度 第 1 回、第 2 回、第 3 回

I. 開催日時	第 1 回	平成 29 年 5 月 11 日	13:30～15:30	出席者 22 名
	第 2 回	平成 29 年 6 月 15 日	13:30～15:30	出席者 24 名
	第 3 回	平成 29 年 8 月 10 日	13:30～15:30	出席者 18 名

II. 要旨

第 1 回こども部会(H29. 5. 11)

1. 新常任委員の紹介

今年度の新たな常任委員 7 名の方の紹介。

2. 今後の市の施策について

〈市からの説明〉

○障害者施策は法律に基づいて、また、各団体からの要望を予算化して実現してきた。

この度市民福祉金の見直しにあたり、その一部が障害福祉の施策、基金積立てに充てられる事となった。現在、(仮称)「宝塚市身体障害者リハビリテーションセンター」を計画案としてあげられている。

①リハビリ機能を備えた生活介護施設 (18 歳以上の機能訓練の充実)

②短期入所 (3 障害が理想だが 24 時間体制の為、難しい面もある)

③総合相談センター (3 障害を統括して中核的に取り扱うセンターを充実させる)

④地域交流センター (災害が起きた際の施設の整備)

どのくらいの規模で、既存の施設か、民間を誘致するか、効果を検討していく予定。各部会から意見をもらい、参考にして中身を詰めていく予定である。

→ 次回、こども部会開催時に、こども部会としての意見を集約して提出する。

3. たからっ子ノートの説明文の原案について

○配布方法：(A3 サイズ)「たからっ子ノートを使ってみましょう」・Q&A は、たからっ子ノートに挟みこみ、初めてお渡しする際に、また、(A4 サイズ)「～たからっ子ノートをご活用ください～」は、既にお持ちの方へ配布する形。

○委員での協議の結果、修正したものを次回こども部会開催時に全委員に配布する。(5 月 23 日に予定の就学説明会にて出席者に渡したいという希望があり、他にも急ぎで必要な方へは先に渡せる形をとる。)

○特別支援教育を受ける時にたからっ子ノートを渡しているが、先々が見えてしんどくなるという保護者の心も配慮という形で、小学校以降を抜いている。抜いている事を保護者には伝えていない。今のところ抵抗なく保護者に受け止められている事もあり、最初からセットで渡す方が理想。

○保護者にとっては、最初からセットがいいという方もいれば、やはりしんどい方もいる。

○市の HP に掲載できないか

○幼稚園・保育所(園)～小学校～中学校～その先へ、継続して引継ぎ、活用できる形としてい

きたいが、これまで途中で分からなくなったり等、具体的に動き出せない現実があった。今回の内容に問題がなければ使ってもらい、不十分な部分は詰めて今後の活用方法に盛り込んでいきたい。

たからっ子ノートを使う事で、引継ぎで何度も同じ説明をする負担が緩和される等、良い面を分かってもらえる事も大切である。

4. 会長・副部会長の任命について

今年も、前年度に引き続き部会長、副部会長をお願いしたいと全委員の意見が一致した。

○今年度、こども部会では困っている問題を出し合い、皆で検討し有意義な会にしていきたい。偶数月の第2木曜日とする。

第2回こども部会(H29.6.15)

1. たからっ子ノート 運用開始について

○配布、運用について:学校教育課で、就学説明会で配布開始している。各事業所でコピーし、随時、配布を行う。

○今後よりいい表現があれば随時、改良していく。A3用紙は既に持っている方へ A4用紙は初めてお渡しする方へとしているが、内容が重複している事もあり、必要に応じて、両方を渡してもらうのも可能。

○幼稚園ではたからっ子ノートを知らない方も多い。全く知らないわけではないと思う。

今回、幼児教育センターが出来、教育委員会との繋がりもできて、私立と公立と一緒にやっ
ていこうという中にある。今後は情報交換、園長会で伝えたり、園をアドバイザーが訪問する際にたからっ子ノートを1冊ずつ持って行き広まるようにしていく予定。

○特別支援保育を受ける方には配布している。年度末に在籍している人数を確認して配布と、窓口での配布となっている。今迄、口頭で説明するだけで終わっていたので、今回の説明書の配布は、後から確認できるので良かったと思う。私立の園長会、公立の所長会で時間をもらって説明し、情報提供していく予定。

○相談支援事業所では児童のモニタリング更新の面談の際に、保護者の方にたからっ子ノートを持っているか確認し、ご存知ない方にはご案内し、利用方法の説明を添えて配布している。

○毎年書いている保護者は持ってくるが、途切れている方は持ってこられない。聞いても「どこにいったかな?」という方もいる。普通学級のみで学習となった場合、後追いをしていない為、持っても学校では把握できていない。学校に黙っている、言ってほしくない保護者がいるかもしれないので、追跡は困難。普通学級のみで学習し、放課後等デイサービスを利用している児童もいる。

○支援級に入っている方はノートを持っている。お母さんたちの横の繋がりがどこまであるのかが不明である。(知的、発達等の症状によるし、また仕事があり顔を合わせる機会も少なくなっている。)

- 何年か先に、たからっ子ノートの活用が当たり前というところまでもっていけるよう、小学校、中学校、高校へとうまく繋いでいける形を皆でとっていききたい。
- 評価の意味で、半年後くらいに意見交換を行う。運用中に新たな疑問が出ているかもしれないので、自身の部署、事業所での状況を把握しておいてほしい。
- 学校教育課において、校長会等で各学校の方に伝わるようにしてもらおう。

2. きょうだい児支援について

- きょうだい児支援のグループ かるがも園が三田にあり、そこをモデルに宝塚ではファミリーというグループで10名~15名 先生が2,3名、スタッフが保護者とボランティア2,3名が集まり、年に1回、きょうだい児とお母さんだけで集まってイベント等をして活動している。
参加した保護者の感想は、良かったという声があり、子どもが作成した作品、写真をじっと見て、過ごした時間を大切に感じている様子があったとの事。11月頃にイベントを予定している。きょうだい児が学生ボランティアと発散し、保護者のケアの講演会、親子の絆を作る時間を持っている。去年の開催は、宝塚市に向けて周知したが、知った人10組しか呼べなかった。障害児をケアするのも大変。四苦八苦しながら頑張っている。また、困っている人がいるかもしれない。多くに周知していきたい。こども部会としても何かできればと思う。
- ボランティア活動への助成が唯一の財源となっている。伊丹の育成会はきょうだいの会へ参加している。
- 宝塚の育成会では、うまくデイを使っているので、きょうだいの会への参加を断った。個人的にはきょうだい児支援は必要と思う。
- 平等にしようと思っても障害児に手がかかる。愛情の取り合い。きょうだい児はガマンしている。アンケートをとるとニーズが出てきた。保護者ときょうだい児の特別な一日を作る支援が必要。
- きょうだい児支援の案を持っているが、きょうだい児を誰が見るかで止まっている。健全児のボランティアをどこから集めたらいいのか。
- 同様に趣旨であれば、学習面でのボランティアに来てもらうのもよい。こども部会として、「きょうだいの会」に丸投げすることはできない。保護者の気づきを促すような講演会はどうか。
- きょうだいの会に参加して、充実していたのでびっくりした。親御さんが講演会で勉強している間、ボランティアに遊んでもらっていた。親同士のネットワークが広がる可能性もある。
- 当事者達のイベントをバックアップすることはできる。以前に保健所で発達障害の母が集まり、困った感を話し合う場があった。2,3年たって無くなった。
- 行事の時、きょうだい早く来て、体育館を借りて運動会をした。10組の親子が限界だった。

園児はお父さんに見てもらおうようお願いし、どうしても無理な方は職員が見た。参加した親子は良かったと感想を述べられた。

- きょうだい児の年齢層は3歳から中学生と幅が広いというのが課題。
- 育成会や子ども発達支援センターと話し合い、協力できるところを聞かせてもらうのはどうか。部会として何ができるか、意見を事務局へ。

3. (仮) 宝塚市身体障害者リハビリテーションセンターへの意見

- 専門家の療法士、看護師の配置は必須である。
- 皆、大阪まで整形外科医に診てもらいに行っている。市内で発達障害を診断、診れる医師が必要。医療が必要な場合、短期入所の利用は大阪まで行っている。市民病院の短期入所も事前の登録が必要でハードルが高い。
- 発達障害がわかる医師を正規に入れてほしい。以前の先生は西宮に引き抜かれた。待遇を良くしないと、定着は難しい。
- 短期入所の「すなご」も小さい時から診ている場合のみ。短期入所にはスプリンクラーの設置が必要となっている。
- 呼吸器装着の児者は病院へレスパイトしているのが現状。済生会か淀川キリスト等、レスパイト先を探すのは大変である。淀川キリストは大人から子どもまで、県外からも来るのでパンク状態。定期的に行って診てもらわないと利用できない。3泊4日が限界。病院さえ受け皿が少ない。医療依存度の高い人のレスパイトが必要。
- 高齢者のリハビリも大切だが、障害児・者のリハビリを優先してほしい。

第3回こども部会(H29. 8. 10)

1. 臨時定例会(7/14)について 報告

○テーマ「今考えている福祉の施策」について、各専門部会でご意見をいただいた後で、各部長さん等にお集まりいただきご意見をいただいた。前回の報告では身体障害の方のリハビリの機能を持つセンターという印象が出てしまったが、全障害を対象とする総合相談機能を持つセンターであり、「障害者総合相談センター」と名称を修正したい。

次に、2つ目のテーマ「発達障がい児(者)支援機関協議」について、こども部会と委員が重なるところも多く、就労や生活など成人の方を対象とする支援機関が参加している。発達障害の二次機関である「宝塚ランチ」や、生活保護には至らないが生きづらさを抱えている人を支援する「せいかつ応援センター」などである。発達障がい児(者)支援機関協議では、検討内容を自立支援協議会に報告を行っていく。

- 校長会で、たからっ子ノートについて、毎年、担任が集めて担任が書いていくように話した。宝特研(特別支援学級の年生が集まる会)でもたからっ子ノートの意義を話した。幼稚園・保育所・療育センターから小学校へ上がる時には必ず教育支援委員会が開かれる。どこの学級に所属するのか、特別支援学校に行くのかを話す。その判断材料にたからっ子ノートが入

っている。小学校への引継ぎはできているが、小学校から中学校へはあまり引き継がれていない。中学も保護者に確認するようにと話した。次に中学から高校につながるのとはなかなかできていない。公立や私立があり、養護学校高等部に行かれる方もいて、その連携はなかなかできない。

もう一つは合理的配慮。一人一人の子にどういった合理的配慮をしていけばいいかをサポートファイルの中に挟んでいかないといけない。今後合理的配慮を入れたものにしていきたい。今年度、「教育・福祉連携会議」を7月24日と8月1日の2日間に渡って実施された。学校教育、子ども発達支援センター、健康推進課、幼児教育センター、障害福祉課、教育支援課、家庭児童相談室、青少年課、健康福祉事務所で気になる子について協議した。乳幼児期の頃から療育センターを経て小学校での様子まで話し合い、充実した話し合いができた。

- 子どもを関係機関で見守っていると感じている。
- 小学校1年の子のみ対象なので、中学に上がる時はこの会議はない。
- 発達障害の子は勉強が難しくなるとついていけなくなる人が多いが、中学になって不安定になる子どももいるのでその対応はこれからの課題になる。
- 子どもが学校についていけなくなってしまった時に、きっちり相談体制をとるために、教育・福祉連携会議がある。
- 相談支援事業所と学校が連携することが求められている。
- 教育と福祉の連携がとれていれば、特別支援学校か地域の学校かは途中で変更もできるように最近はなっている。子どもの情報を一つの学校だけが持っているというのではなく、関係機関で共有していくことは大事である。
- サポートファイルを保護者の方が持って来られたら見せていただいている。伊丹市の小学校から来た子はノートを持って来るが、宝塚の子どもさんはあまり持ってこられない。
- 伊丹は学校の先生が書き保管されているようだ。伊丹の保育所ではサポートファイルをまとめて保管されているようだ。
- 宝塚では教師は学校の様式に書いているので、たからっ子ノートには書いていないと思う。
- サポートファイルの活用の仕方を親御さんと学校の両方がわかっていないと続いていかない。
- 中学での支援や関わり方を書いておき、高校でも見てもらおうとよいのではないか。
- 次に入学する高校へ、引継ぎをする時にプリントを配るか、郵送したら見てもらえるのではないか。
- 普通科高校では親御さんにサポートファイルがあることが知られていない。受験時に親が自分の子どものことで要望を出すので、ある程度はこどもの特徴を書けるが、生活面のことはサポートファイルがある方がよい。
- 学校から学校へ渡してくれればいいが、宝塚の学区で公立高校と特別支援学校とで10校以上あるので郵送は難しいのではないか。
- 今年、学校側に在学中にしてもらうことと、送り出すときにしてもらうことを考えてみませ

んか。

○高校はそこまで特別支援教育について理解がなく追いついていないのが現状である。東播の方では引継シートを作っていて、県でもそのような話が出ている。宝塚でも今後は考えていかないといけない。

2. きょうだい児支援について

○西宮市の自立支援協議会のこども部会「宮っ子会議」を見学してきた。一番大きな違いは、委員数が 30 人以上であるということ。さらに、全体での話し合いの時間は短く、ほとんどの時間は、3 グループに分かれて話し合いをしていたこと。名称は①（宮っ子ファイル G）②（こどもの居場所・地域の連携 G）③（放課後等デイサービス G）の 3 グループ。①では、今回は防災の避難マニュアルについて話されていた。②では合理的配慮をどうしたら一般の人に周知してもらえるかを劇（ペープサート）で理解してもらおうという話し合いであった。③では放デイのガイドラインができていますが、集まっておやつを食べて終わりというようなどころもあるので、それをどうやってレベルアップしていくかを話し合っていた。各グループともテーマが絞られていることや少人数ということもあり、活発な話し合いがなされていた。このやり方は場合によっては宝塚でも使えると思った。

○宝塚市のこども部会はなかなか先への一歩が進めていないのが現状なので、宝塚の部会も先に進めるような会にしたいと思った。

○絵本を何冊か持ってきているお母さんや民生委員と見られる年齢の高い方も意見を出しておられた。もしかすると障がいに関わりがない方もおられるように思ったが、それなりに自分の立場で考えておられた。

○宝塚市の自立支援協議会で「きょうだい児支援」についてできることは何だろうと思い、きょうだいの会「ファミリーユ」を見せてもらった。財源もなく、口コミでボランティアを募り活動をされている。その代表者とお話して、こども部会としても何かをお手伝いしたいということをお伝えした。今年は 10 月 29 日にアロマや学びも取り入れたイベントを計画されている。今後何かできればということになった。

○きょうだい児支援のイメージがわからない人もいるかもしれないが、親子で制作した思い出の品や写真を大事にしていた。お母さんが自分を見てくれていると子どもが再確認できて、安定するお子さんが多いということだった。

○ファミリーユでは、場所や人的な確保等、会の運営をどう考えているのかを聞いてみたいと思っている。今、自立支援協議会でできることは何なのか。

○きょうだい児支援の際には、障害のある本人を家族がみるか、レスパイトのサービスを使ったりする。

○最近は放課後等デイサービスが充実してきて、昔と比べたら、お母さん(お父さん)と健常の子の時間はとれるが、意識して作らないと、健常の子と 2 人だけの思い出はなかなか難しい。

家族でどこかに行くとなっても、障害のある子に時間が取られるため、こういうイベントを通して思い出を作ってほしい。きょうだい児支援についてのアンケートを取った中でもニーズが高かった。

- 健全の子と障害の子と一緒にの取り組みはある。夕涼み会など、きょうだい児も誘ってという形で行っている。きょうだい児だけをというのはやっていない。
- やはり見過ごされていると思う。知的の子の家の健全児はいい子が多いか、もしくは、荒れるかのどちらかという印象がある。子どもは愛情の取り合いなので、このような二人だけの思い出が一つでもあれば違うのではないか。お母さんに引け目があることも多い。子どもも淋しい気持ちを出さずに良い子でいたいといけなさと我慢しているのではないか。親御さん対象の講演もいい。
- お母さんも健全児に対して、「ちょっと見ておいて」ということも多くなり、そんな中で「淋しいねん。」が言えなくなる。
- 以前、他市の保健所で育児ノイローゼになっている母親の相談を受けた時に、障害と健全の子育ての中で健全児が多動になってきたときに、支援者にきょうだい児のこともしなあかんと言われ、母親はどうしたらいいのかと精神的にしんどくなっていたことがあった。きょうだい児支援の大切さはわかる。が、一方で、もう十分に頑張っている母親自身を認めて、きょうだい児にも目を向けていこうという視点が必要である。
- 子育てする中で思うのは、母親は頑張っているのを認めてほしいと思っているわけではないが、お母さんの逃げ道というか、協力者、基本的には父親にも何かしてほしいと思う。子どもはお母さんには甘え、お母さんにしか頼まなくなる、我が家でも、お父さんがそこにいるのに、子どもは何でも母に頼む。
- 日曜日にお父さんと知的障害の子とのイベントをしている。最近はイクメンで、お父さんの参加は多い。終わった後に子どもはバスで帰ってお父さんだけ残り、父親会をする。そこで出るのもお母さんをどうサポートするかということ。帰ってきたときにどんな風に話を聞か、うんうんと言うだけでもいいとか、休みの日にお父さんと子どもとでバーベキューをするのもいいとか。
- お父さん自身は、お母さんはお父さんがやったことに満足してくれないと思っている。自転車の乗り方を子どもに教えてもお母さんは認めてくれないと思っている。
- お母さんがストレスを抱えているので、仲間づくりをしてもよいですね。

3.今後の展開

- ・たからっ子ノートの活用についてのリーフレットを作成したので、今後はどのように活用できているか、経過を見ていき、評価し、よりいい表現があれば改良していく。
- ・将来的に、たからっ子ノートの中学から高校への引継ぎをどのようにしていくかを考える。
- ・きょうだい児支援について、こども部会としてできることを考え、それをどのように活動に移していくかを考える。